

特集

温故知新

～『知恩』とともに、今を生きる（特別編⑦）

過去の先達のことばに学ぶ



昭和24（1949）年に創刊の『知恩』誌は、幾多の先人たちが珠玉のことばを残しています。前回（2025年7月号と9月号）は、大正、昭和を代表する作家のひとりであった詩人の佐藤春夫（1892～1964年）の寄稿や講演に焦点を当てました。今回は60年前の昭和41（1966）年の『知恩』誌を飾った僧侶で作家の寺内大吉師（1921～2008年）の講演に触れましょう。

（編集部）

●16歳の長男の死に直面し、考えさせられたこと

寺内大吉師は浄土宗のお寺に生まれ、終戦の年に大学を卒業、住職の傍ら作家活動に入った直木賞作家で、ペンネームは自坊の大吉寺に由来します。初期には競輪などスポーツ分野での評論のほか、ベレー帽をかぶった気軽な姿でテレビにも登場し、昭和のお茶の間で親しまれた人でした。後年は本名である成田有恒師として、20世紀最後の浄土宗宗務総長（1991～2001年）として尽力し、さらには大本山増上寺の第87代法主（2001～2008年）を務め、浄土宗の発展に寄与しました。

『知恩』誌へは1965年の御忌大会法要の際の記念講演に登壇し、翌年の5月号から3カ月間、講演詳細が載りました。タイトルは「レジャーとしての宗教」。当時も今もかなり軽い感じのする演題ですが、軽いタイトルとは裏腹に深刻な話から始まりました。

「私は皆さまに心から感謝の誠を捧げたい」と切り出した寺内大吉師は、子どもが3人いる話をします。「一番上が男の子で、これが16歳になりますが、今月（1965年4月1日）に突然、この子が亡くなり……（中略）……、今日がその子の三七日に該当するのであります」